

較がなされており、西氏の説く様式変化の要因を考えるうえで重要な作業と言えよう。このほか、講演記録として、奈良三彩の基本意匠を金属器の模倣に求めた「奈良三彩の造形意匠について」と、平城宮出土紀年木簡と土器の年代決定の関係を論じた「紀年木簡と土器の年代」を収める。

I、II部にみられるような古代の土器に関する研究に進まれる以前に、西氏が著された論考がIII部に収録されている。ひとつは京都大学文学部に提出された卒業論文である「縄文時代の狩猟具」であり、いまひとつは京都大学考古学研究会での活動に基礎をおく「御堂ヶ池群集墳出土土器の編年」である。前者は、扱った時代、遺物とも他の諸論とは全く異なるが、累積グラフを用いて縄文時代の石器組成を論理的に説明する部分など、のちに西氏が法量表を用いて土器の規格を明快に説明したことと重ね合わせると興味深い。

本書に収められている土器に関する論考は、それぞれ個別の問題を扱っているが、方法として同一の基盤に立つことが看取できる。すなわち、製作技術や法量規格などの細かな検討から出発して、土器様式の特

質を捉え、さらにその背景をなしている歴史的な事象を明らかにするという姿勢である。これは、ともすれば方向を見失いがちな昨今の土器研究に対して、とるべき進路を示す指針のひとつとして意義を持つものである。本書に示された土器研究の方向がさらに継承、発展されて、ひとつの体系として結実し、歴史叙述のなかに生かされていくことを願ってやまない。

なお、本書には、小林行雄博士による序文、ならびに靈前に捧げられた弔辭が収められており、西氏の人柄が偲ばれると同時に、改めて哀惜の念が胸を衝く。末筆ながら、心より西弘海氏の御冥福をお祈りして、紹介の筆をおくことにしたい。

(A5判 二九九頁 一九八六年五月
二二日 真陽社 三〇〇〇円)

(菱田哲郎 京都大学助手)

会 告

昭和六十一年度史学研究会大会
および総会は、予定通り、十一月
二日(日)午後一時より楽友会館
において開催されました。

公開講演は杉村邦彦、本田實信
の両氏により左記の演題で行なわ
れ、盛会裡に終わりました。

楊守敬と日本人書家との交流

杉村邦彦氏

ラシード・ウッディーンの

『集史』について

本田實信氏

昭和六十一年度

史学研究会大会講演要旨

楊守敬と日本人書家との交流

杉村 邦彦

今日は「楊守敬と日本人書家との交流」と題し、なるべく私の発掘した筆談、書簡、日記など、なまの資料を使いながら話を具体的に進めてゆきたいと思う。

楊守敬の名が今日東洋史研究者の間で真つ先に記憶されるのは、北魏の酈道元の著した『水経注』の最も精細な注釈、『水経注疏』の著者としてであろう。さらに日本近代の書道史に多少とも関心のある人たちには、明治十三年四月、清国の出使日本大臣（正式にはそういったが、以下便宜上駐日公使と簡稱する）何如璋の招きに応じて来日し、同十七年五月に帰国するまで前後五年間にわたってわが国に滞在し、有名な書家、目下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯らにいわゆる北派の書法を伝えた人として知られている。しかし、それでは具体的に楊守敬が日本人とどのような交流を持ったの

か、あるいは楊守敬に関する研究はどこまで進んでいるのかということになると、ごく少数の例外を除いて、甚だ寂しいと言わざるを得ない。

まず資料の1（当日配布した資料の番号、以下同じ）に、楊守敬に関する主な伝記資料十点を列挙しておいたので、それを御覧頂きたい。このうち、最も信憑性が高く、また最も精彩に富むのは(一)の楊守敬自述の『鄰蘇老人年譜』で、宣統三年（一九一）十一月頃までを楊守敬自身が書き、それ以後は門人の熊会貞が補筆したものである。

(二)の吳天任『楊惺吾先生年譜』は(一)をもとにし、その他の資料によって増補したものの(三)の『清史稿』卷四八六の楊守敬伝は張裕釗伝に附載されているものであるが、これは簡単すぎてあまり役に立たない。むしろ(四)の袁同礼「楊惺吾先生小伝」(『圖書館學季刊』第一卷第四期)が、楊守敬の学問とその形成過程を系統的に紹介していて参考になる。

楊守敬は字を惺吾、号を鄰蘇老人といい、道光十九年（一八三九）、すなわちアヘン戦争勃発の前年に湖北省宜都の商家に生まれ、わかくして家業を手伝うかたわら学問

に励み、二十四歳で郷試に合格、その後北京での会試を四十八歳までに七回も受けたが、どういうわけか失敗を重ね、遂に科擧を断念して著述に専念することにしたと、

楊守敬自身が年譜の中で記している。そして前述のとおり、光緒六年（一八八〇）すなわちわが明治十三年から、光緒十年までわが国に滞在し、朝野の人士と交流を深めた。帰国後は、湖北省の黃岡教諭、黃州府儒学教授、武昌の兩湖書院教習、勤成学堂総教長などの学職を歴任した。そして、一九一一年に武昌で革命軍が蜂起すると、上海の友人のもとに身を寄せ、民国三年（一九一四）新たに設置された参政院参政となつて北京に赴任したが、それもつかの間、翌年七十七歳で没した。

楊守敬の学問は、金石、書学、地理、目錄（すなわち書誌）などの各方面にわたるが、このうち最も早く開花し、晩年に至るまで力を用いたのが金石学と書学であり、ついで中年になって日本へ来航した頃から目錄学を研鑽し、晩年には地理学に精魂を傾けた。まず、金石、書学に関する著述に『激素飛潜閣平碑記』、『同平帖記』、『望堂金石文字』初集二集、『楷法溯源』（潘存原

輯、楊守敬編、『集帖目錄』、『寰宇貞石圖』、

『鄰蘇園法帖』、『學書適言』(水野疎梅の求めに應じて書いたもの)などがあり、地理に関するものに、前記『水経注疏』のほか、『歷代輿地図』、『隋書地理志攷証』、『漢書地理志補校』、『晦明軒稿』(但し上下二冊のうち下冊には金石の序跋を取める)、『水経注図』、『水経注疏要刪』などがあり、目錄に関するものに『古逸叢書』、『日本訪書志』、『留真譜』正統などがある。このほかにも彼の手で輯逸、校刊された書物が多い。

楊守敬が来日したいきさつについては、彼自身が年譜の己卯四十一歳(光緒五年、明治十二年)から庚辰四十二歳の条にわたって詳しく書きとめている。それによると、

当時北京に滞在して定職のなかった彼は、駐日公使何如璋から、随員として採用するから日本に来ないかという書簡をもらった。そこで彼は家族を連れてまず天津から上海に赴き、海を渡って日本へ来たが、何如璋と副公使の張斯桂が仲違いをしていたため、楊守敬の随員採用の件もしばらくお預けとなっていました。こうして日本へは来たものの、決った仕事がないので、古書店を回ったり、学者、文人、書家などと

の交際を深めてゆく。

翌明治十四年、何如璋は任期が満ちて帰国することになり、楊守敬もこの時一緒に帰国するはずであった。ところが、二代目の公使として赴任して来た黎庶昌の随員に張沆という人物があった。この人は楊守敬の先輩張裕釗の長男で、かつ黎庶昌の女婿にも当り、楊守敬にあてた父裕釗の手紙を携えて来っていた。そのお蔭で他の館員たちは何如璋とともに中国へ引き上げてしまつたが、楊守敬だけは日本に残り、日本人との交流を深めることになった。これは日本の学界や書壇にとっても実に幸運であったと言わねばならない。

年譜の壬午四十四歳の条を見ると、彼が日本へ来て驚ろいたのは、町の古書店に中国では見たこともないような珍らしい漢籍類の多いことである。そこで、中国から携えてきた漢魏六朝の碑版や古銭、古印を日本人に手離し、その代価をもってそのような古書を買っていた。さらに黎庶昌には『古逸叢書』を刊刻したいとの志があり、その仕事を楊守敬に委ねていたことも彼には好都合であった。当時、日本は文明開化の時代で、国民の目はおおむね欧米の先進

諸国に向けられていたから、カビ臭い漢籍などは恐らく二束三文でたくさん出回っていたにちがいない。楊守敬はそこに目をつけて買い集め、自分の著書の中でそれらを紹介したのである。日本人にとってはあまりありがたいことではないが、見方によっては、それまでわが国に埋もれていた珍らしい古典籍が中国にも広く紹介されたわけで、学問上の功績はやはり大きいと言わねばなるまい。

さらに年譜の同じ年には、「是の時日本の文人と往來の最も密なる者は、巖谷修一六、日下部東作鳴鶴、岡千仞振衣なり」とある。岡千仞は仙台の人、修史館協修、東京図書館長などを歴任し、漢詩文をよくした。ここに名前を出てこないが、もう一人重要な人物に松田雪柯がある。楊守敬はこのような人々と日夜往來し、交流を深めた。年譜の民国四年、この条は熊会員の筆になるのだが、山本竟山の名も見え、「先後數千里を遠しとせずして来り、業を門に受く」とある。

楊守敬と一六、及び楊守敬と鳴鶴との交遊については、彼らの間でかわされた筆談がすでに公刊されているので『書芸』第四

卷第十一号、『八稜研斎隨錄』など)、ここでは省略し、松田雪柯、山本竟山らに関する新しい資料を次に紹介したい。

松田雪柯は伊勢の社家の家柄で、若い頃京都に出て貫名菰翁に書法を学んだ。明治十一年、一六、鳴鶴に誘われて上京し、麹町平河町にあった一六の屋敷の離れに単身で寄寓していた。そして楊守敬の来日を迎えることになる。松田家には、雪柯が漢文毛筆で書いた多くの日記が遺されている。資料の8はその『雪柯日記』(未刊)の明治十三年七月十七日の条で、雪柯が鳴鶴、一

六、そして島田蕃根とともに清国公使館に楊守敬を初めて訪ね、楊守敬が中国から携えて来た漢碑の拓本などを見せてもらった時の記録である。(以下詳しい内容の説明は紙幅の都合で圧縮した)。さらに資料の10は、同じ日記の同年八月二十一日の条で、この日の夕刻、楊守敬が雪柯の仮寓を訪ねて来たときの面白い話が記されている。

清国公使館にしばしば出入りし、楊守敬とも親しく交った一人に宮島誠一郎がある。幼名を熊蔵といい、栗香、養浩堂と号した。米沢藩士で、幕末における東北諸藩の和平工作に尽力し、のち貴族院勸選議員となっ

た。楊守敬と宮島との間にかわされた筆談は美しい詩箋に書かれており、話題は政局、文学、書法など広い範囲にわたっている。資料12はその筆談の一部で、これを読むと、当時の日本の著名な書家、巖谷一六、長三

洲、三条梨堂等について順次批評を加えたあと、「貴邦の書家、余最も貫名に服す」として、貫名菰翁を最も高く評価していたことがわかる。菰翁は当時すでに没していたが、恐らく楊守敬は鳴鶴や雪柯の家で菰翁の書を見る機会があり、その晋唐を握り所とした本格的な書を見て感服したのであらう。

このほかにも、楊守敬が滞日中に日本人と交した筆談や書簡で、内容の面白いものも少なくないが、時間の都合で省略する。明治十七年五月、楊守敬の任期が満ちて帰国するに際して、岡千仞と甥の渥が同行した。その時の模様は、岡千仞の中国旅行日記『観光紀游』の中にいきいきと描かれている。例えば、五月廿九日新橋の停車場を出立、横浜港から乗船した一行は、三十一日の朝、神戸港に碇泊、領事館で款待を受けたあと、出帆までにまだ少し時間があつたので、楊守敬は千仞とともに汽車で大

阪へ赴き、心齋橋の古書店で宋版の『尚書』を入手して喜んだといったことなどが興味深く記されている。

次に、楊守敬と山本竟山との交遊を示す資料の中から二、三を紹介したい。竟山は名を由定といい、竟山はその号で、別に壘鳳とも号した。岐阜の人。神谷簡斎について書法を学んだのち、鳴鶴に師事、明治三十五年、楊守敬を慕って中国へ渡り、吳昌碩らとも親しく交わって見識を深めた。明治末年に京都へ移り、関西の書壇に重きをなした。竟山が初めて楊守敬を訪ねた時のいきさつは、資料の16、明治三十五年二月十二日に鳴鶴が竟山に与えた書簡によって知ることができる。これによると、竟山は鳴鶴に紹介状を書いてもらった上に、さらに鳴鶴の勧めで当時京都に滞在していた羅振玉の紹介状をも携へて中国へ渡り、楊守敬に謁見したようである。

資料17は、楊守敬が竟山に与えた書簡の一つで、先に竟山から贈られた『和漢年表』の礼を述べたあと、この年表には日本の南朝の年号が載せられていないので、さらに『和漢年表』一部を購入してほしいと依頼したものである。恐らく楊守敬はわが国南

朝の記年のある典籍などについて調査をするため、和漢対照の年表が必要だったのであろう。これによって、わが国の古い典籍や金石文に関心の深かった彼の面目の一端が偲ばれる。

資料18は、楊守敬と竟山との筆談で、竟山が自作の対聯一点を持参して批評添削を請うたのに対して、八分書を書くには軟筆毫を用いて書くべきで、硬毫を用いてはいけない、あなたの近日の楷書はたいへんよろしく、鳴鶴とも優劣がつけられないほどだ、ただし漢碑の臨書が足りないと言っていて、具体的な助言を与えている。

資料19も楊守敬が竟山に与えた葉書で、竟山が持参して批評を請うた自作の行楷対聯がたいへんよくできているので、記念として私の方にそれを頂戴したいと言い、師弟間の温い交情が偲ばれる。

資料20は、日下部家に伝わる逸品で、鳴鶴の肖像に呉昌碩と楊守敬が賛を加えたものの。画面の左下角に「静山」という朱文の落款印が押されているが、これだけでは筆者が誰であるか判りにくい。ところが資料21及び23の、竟山にあてた鳴鶴の書簡によつて、この肖像の筆者は陳年（紹興の人、

北京中国画院副院長、呉昌碩の門下）であり、竟山が鳴鶴から借りたその肖像写真を携えて中国へ渡り、それを陳年に示して肖像画をかいてもらい、さらに楊、呉二家に賛を依頼したものであることが判明する。

また楊守敬の賛を読むと、竟山は同じ肖像を二枚かいてもらい、一枚は自分のものにして私淑の印とし、一枚は鳴鶴に贈ったことも明らかとなる。資料として出したのは、そのうちの鳴鶴本である。さらに資料24の、竟山にあてた鳴鶴の書簡を読むと、鳴鶴自身もこの肖像と題賛がたいへん気に入っていたらしく、裝潢に附して自分の八十歳の賀筵に用いたという希望をもらしている。このほかにも、楊守敬と日本人との交流を如実に示す資料は少なくないが、今回はその一端を紹介するに留める。今後、近代の日中文化交流を研究してゆく場合、このような筆談、書簡、日記など、当事者の手になるなまの資料をできうる限り発掘し、それらを使ったキメのこまかい研究の必要性を痛感する次第である。

（京都教育大学教授、東洋史学）

ラシード・ウッディーンの『集史』について

本田 實 信

ラシード・ウッディーン・ファドルラーフ（二四七頃～一三二八）は、イラン中央部のハマダンに生れ、イルハン宮廷の典医となったが、フラグ・ウルス第七代の君主ガザン・ハン（在任一二九五～一三〇四）に見出されて、その宰相（在位一二九八～一三一七）となり、ガザンの改革政治の立案・実施を担当した。さらにガザンの弟で、次代のイルハンとなったオルジェイト・ハン（在位一三〇四～一三二六）を輔弼し、モンゴル政権下におけるイラン社会の安定とイラン文化の発展に尽瘁した。しかしオルジェイトの子アブー・サイードが即位するに及んで、ラシードは罷免され、先帝毒殺の嫌疑をかけられて処刑されてしまった。さてイスラム教に改宗しながらも、モンゴルの伝統を堅持しようとしたガザン・ハンは、己の「佳い名」を後世に残すため、宰相ラシードにモンゴル史の編纂を命じた。ラシードは鋭意この編纂事業に当たったが、

ガザン在世中には完成に至らなかった。オルジェイト・ハンはモンゴル史と併せてさらに世界史を編纂することを命じた。一三〇一—一三一年稿成ってラシードはこれをオルジェイトに捧呈した。これが『集史(Jami' al-Tawarikh)』である。

『集史』の内容は、現行『集史』の序文によれば、第一篇モンゴル史、第二篇世界史、第三篇地理誌である。第三篇地理誌は現存の『集史』写本のいずれにも含まれておらず未発見である。或は執筆されなかったのかもしれない。

第一篇モンゴル史は、トルコ・モンゴル諸部族誌、チンギス・ハンの祖先、チンギス自身、チンギスの子孫の歴史から成り、十四世紀初年に至るモンゴル帝国史の根本史料である。特にトルコ・モンゴル諸部族誌には、他書に見出されぬ独自の記事が含まれている。末尾のガザン・ハン紀はラシードの同時代史であり、親しく仕えたガザン・ハンについての詳細な記事と、宰相として実施した諸事業についての精密な記録が載せられている。

第二篇は二部から成り、第一部には、イスラム以前のイラン古代史、預言者ムハン

マドからアッバース朝に至るイスラム史、及びガズナ朝、セルジューク朝、ホラズムシャー朝、サルグルル朝、イスマイル派(西方のフアーティマ朝、東方の暗殺者教団)のイスラム諸王朝史が含まれる。第二部は世界諸民族史とも称すべきもので、

(1)オグズ史 (2)ヒタイ史(仏陀伝を含む)
(3)イスラエル史 (4)フランク史 (5)インド史(シャカムニ伝を含む) から成る。第一部には他の史書に見出されない独自の記事も含まれているが、概して言えば依拠史料のある編纂ものであり、構成も前例に依っている。これに対して第二部は、非イスラム圏の諸民族の歴史であり、従来のイスラム史学の枠外に食み出すものである。ヒタイ史は漢籍からの、イスラエル史はヘブライ語からの、フランク史はラテン語からの、インド史はサンスクリット語からのペルシヤ語訳である。

ラシードはさらにペルシア語本『集史』を正本として、そのアラビア語訳を作成させた。

『集史』の重要性は夙に認識され、西欧各国ではその良写本の収集、校定テキストの作成、翻訳に多大の努力が注がれてきた。

校定・訳註に就いては、E. Quatremère, I. N. Berezin, E. G. Browne, E. Blochet, K. Jahn, Ahmed Atoş, A. A. Alizade, Iraj Afshar などのイランニスト達の名を逸することはできない。

今、私はラシードの『集史』に関連して次のような研究計画を持っている。

(一) ラシードの伝記

ラシード処刑の後、その一族は逼塞したが、アブー・サイード治世後半には、長子ギヤース・ウッディーンが宰相に任ぜられており(在任一二三七—一二三六)、ラシードの政治理念が復活している。ラシード伝は彼の生涯ばかりでなく、十三—十四世紀のイスラム史、イラン史の上で位置づけられねばならない。ラシードには『集史』の他に神学作品があり、さらに漢語医薬書のペルシア語訳『イルハンの珍貴の書』、チンギス家の系譜及び后妃・部族長の表である『五族譜』があり、『ラシード書簡集』も遺っている。近年ラシード自筆の寄進文書 Waqf-nama-i Rab-i Rashidi が発見された。ラシードに関連する史料はその他にも多々存する。

(二) 『集史』の邦訳と注釈

『集史』全篇の大部分が活字本で利用できるようになっていて、その内の良好なテキストを底本にして邦訳が続いている。ただ活字本に拠るだけでは不十分である。

原写本に当たらなければならなくなっている。既に小林高四郎博士によって『集史』の最古・最良の写本であるイスタンブール・トプカピサライ所蔵本の写真が我が国に将来され、東洋文庫に備えられており、測り知れない恩恵を蒙っている。トプカピサライ本はラシード在世中の一三一七年にバグダードで作成されている。

もう一つの写本系統としては、ティムール朝シャールフ治下のヘラートにおいて、ハーフィズ・アブル（一四三〇没）によって作られた再訂本に由来するものがあると考えられる。現在、トプカピサライ本複写の他に、大英図書館、インド庁図書館、テヘラン大学図書館に所蔵されている『集史』写本の写真を利用し得るが、これでは不足であり、なおその他のすぐれた写本のマイクロフィルムを入手したいと思っている。なお邦訳に当っては、ジュヴァイニーの『世界征服者の歴史』、ヴァッサーフの『歴史』の他に、ラシードの『集史』に依

拠している『バナカティー史』、ムスタウフィーの『選史』なども参照しなければならぬ。

『集史』の文章は平明であり、難読な文体ではない。しかし固有名詞の読み方はなかなか決定し難いものがある。またモンゴル語乃至トルコ語に由来する術語が多用されており、その原義をよく理解していなければならぬ。フラグ・ウルス国制の史料集とも言うべきナフチェヴァーニーの『書記規範』も『集史』研究に不可欠の文献である。

昭和六一年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の受領について

昭和六一年度の史林の刊行費の一部として、文部省学術国際局から昭和六一年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けております。

編集後記

本号は、新改築なった京都大学附属博物館での記念すべき第一回編集号です。私が約一年半前に編集委員になった頃、博物館（陳列館）は建造中。それで編集会議は、京大会館や楽友会館、発明センターの貸会議室を転転としていました。今号からはずっと博物館で編集会議が開かれることになりましたので、場所を間違えて遅刻する編集委員（長）もなくなるでしょう。

前号まで順調だった発行ペースが、本号から大幅ダウンになりそうです。会員の皆様には、何卒御容赦下さい。

（光春）

一九八六年二月二五日印刷 定価一〇〇〇円
一九八七年一月一日発行 送料五〇円
史 林 第六九巻第四号（通巻第三八八号）

発行人 史 学 研 究 会

理事長 越 智 武 臣

印刷所 中村印刷株式会社